

シシ語尾形容詞と「不十分終止」

京 健 治

1. はじめに

室町期以降の口語資料である抄物資料・キリシタン資料・狂言資料等に於いて、連体形終止の一般化に伴い、一般的には衰退したとされる古典語終止形が屢々みられ、それらが中止法的な用法な物言いー「不十分終止」用法^{註1}ーといった表現性を有しながら使用され続けている。

- (1) a 耳も遠し、目も悪し、中にも、腰がかがうて、月日が、拝まれいで、是が迷惑な
(狂言六義「腰折」)
- b この北の方は新大納言の娘で、この腹に六代御前と申して十におなりある若君も
ござつ、夜叉御前と申して、八つにおなりある姫君もござつたが、
(天草版平家物語・184)
- c そうじてそれがしハ、人の行なといふ所へハゆきたし、又ミなといふものハミ
たい、此おすハちとミたい事でハないか
(祝本「おす」)
- d 実盛心は猛けれども、老武者なり、手は負うつ、二人の敵をあひしらはうとする
ほどに、手塚が下になって、つひに首をとられた。 (天草版平家物語・170)
- e 相撲は見たし・相手はなし・しよせん身共かたらうといへト云
(和泉家古本六義「鼻取相撲」)

上に示したように、連体形終止が一般化した後であっても、古典語の終止形が「不十分終止」用法として使用されるという状況にある。こうした古典語終止形による「不十分終止」は、終止形を有する句が並列的關係を示したり、原因・理由を示しており、現代語の接続助詞「し」の用法に相当するものであり、その文法史的意義等についても言及されてきたものである。なお、接続助詞「し」は近世初期頃成立を見る^{註2}。発生初期の例をいくつか示しておく。

- (2) a 賂次すがら付合をして、付たらは松を取るまいし、あ付ずは松をとらふ
(虎明本「ふじまつ」)
- b 御世に御出でなされたらば、おれもじや／＼馬に乗らうし、其時はそちも乗物に

乗せて歩かさうぞ

(好色伝授・中)

- c コレ物言ふまい、二三日もあしらはねば、又はづれるし、薬に及ばぬ、退いた

／＼

(御所松堀川夜討)

- d 若づるがでるし、七こしがでるし、七里がでるし、扇屋のかたうたがでる

(通言総籙)

- e 此様な糺明には逢ふし、とんと独り居ても持たぬによって (漢人漢文手管始)

(1) に示したように、室町期以降、古典語終止形による「不十分終止」が見られるのであるが、ここでは、形容詞の「不十分終止」のあり方について、少しばかり考察を加えてみようと思う。(1 a) に「遠し」「悪し(わるし)」、(1 e) 「なし」が見られる。これらはク活用形容詞の例であるが、室町期以降に於ける形容詞「し」語尾による「不十分終止」用法の在り方について、鈴木浩氏によると、シク活用形容詞の本来の終止形「一し」語尾での使用は見出し難いという³⁾。

ちなみにシク活用形容詞の「不十分終止」は(3) に示すように、「一しし」語尾での使用例が見られる。

- (3) a 今コ、ニイマメカシク次公カ字ヲ引キコトモヲカシ、又宋彦材カコトヲ次公カ引クコトモアルマシ、イツレ辺ニ彦材ノ二字ハアマリテ見ヘタ

(四河入海・5ノ2・48ウ)

- b 云出セバハツカシ、又浦山シサニ手向ヲスルデ候 (三体詩絶句抄・3・29オ)

- c 扱々めいわくな事や、鶯はほしし、爰に思ひダイタ事があるを、申さうカト云

(天理本「鶯」)

- d ことしはあし、来年はよし

(輕口露がはなし)

さて、シシ語尾の発生については、北原保雄氏が明らかにされたように、「一い語尾」からの再構によるものであろう⁴⁾。また、「一しし」語尾と「不十分終止」との関係は、室町期以降の、口頭語での終止形「い」語尾と「不十分終止」としての「し」語尾との対応関係から捉えることができる。

【ク活用】 ない：なし (不十分終止)

【シク活用】 はづかしい：はづかしし (不十分終止)

先述の如く、連体形終止法が一般化した室町期以降にあって、古典語終止形が「不十分終止」として使用されることが知られるが、そうした中において、シク活用形容詞の「不十分終止」が本来の終止形「一し」語尾ではなく、いわゆる「一しし」語尾形容詞の形で現れている。このことは古形残存の経緯を見る上でも興味深いように思われる。そこで本稿では、シク活用形容詞の「不十分終止」のあり方について考察を加えてみようと思う。

2. 室町期以降に於ける形容詞終止形の使用状況

室町期の口語資料である『天草版平家物語』に於ける「一シ」語尾形容詞の使用状況をみることにする。『天草版平家物語』にみられる「一シ」語尾形容詞は、ク活用のものは異なり語数20語、延べ語数79語であり、シク活用のものは異なり語数15語、延べ語数89語である。(ただし、シク活用においてはシシ語尾のものが2例「おかしし」「きびしし」それぞれ1例一見られる。これについては後に触れる。)

『天草版平家物語』中に於ける形容詞「一シ」語尾の用法を見ていく。まず、ク活用形容詞の様相を見てみよう。

- (4) a こゝは山も高し、谷も深し、四方は岩石ぢやほどに、搦手へもたやすうはよまはらじ、
(天草版平家物語・165)
- b 浄妙に力をつけうとて、つづいて戦うたが、橋の行桁はせばし、通らうやうはなし、浄妙が甲の手先に手をおいて、
(天草版平家物語・127)
- c 法皇もおん涙を流せられ、おほせくださる旨もなし、少将も涙にむせび、申しあげらる旨もごさなかった。
(天草版平家物語・36)
- d 西王母が三千歳も昔語りで、今はなし。東方朔が九千歳も名のみ残って、姿はない、これが善知識のもとみでござんと言うて
(天草版平家物語・314)
- e 田もなし、畠もなし、村もなし、畑もなし、おのづから人はあれども、言ふことばも聞き知らず、
(天草版平家物語・84)

次にシク活用形容詞「一シ」語尾の使用状況を見てみることにしよう。シク活用形容詞の「一シ」語尾は、(5 a) の「恋し」、(5 b) の「正し」が見られる。

- (5) a 三位の中將北の方のお文よりも、若君、姫君の恋し、恋しと書かれたをみて、
(天草版平家物語・290)
- b 家に諫むる子あれば、その家必ず正しと言ふことは、もつともぢや、
(天草版平家物語・52)

(5 a) は手紙に書かれた部分の表現、(5 b) は古い言葉の引用であり、「不十分終止」用法ではないと見てよいであろう。

『天草版平家物語』に於ける形容詞「一シ」語尾について検討したが、ク活用形容詞「一シ」語尾での「不十分終止」は観察されるが、シク活用形容詞「一シ」語尾での使用例は見出し難い。

では、シク活用形容詞には「不十分終止」用法が存していないのかということではなく、

「シシ」語尾での使用例が認められる。(6)に「シシ」語尾の例を示す。

(6) a しばしここでいたはりまらせうずるものをとはおほせらるれども、世のきこえも
おそろししとあって、急ぎ高雄へ送り奉られた。 (天草版平家物語・394)

b もとよりあらがはぬうへに責めはきびしし、残りなう申したを白状四五枚にしろ
いて、やがてしゃつが口をさけと言うて口をさかれ、首をはねられた。

(天草版平家物語・27)

この2例のうち、(6a)の「おそろしし」に関しては「不十分終止」用法ではなさそうであるが、(6b)の「きびしし」の例はその文意からして、「責めはきびしいし…」の意と解し得るところであり、「不十分終止」の例であるとみてよいであろう。

【天草版平家物語】中、形容詞の「不十分終止」を見るに、ク活用形容詞の「不十分終止」は比較的多くの用例が拾い上げられるのに対して、シク活用形容詞の「不十分終止」では「一シ」語尾の例は拾い上げられず、「一シシ」語尾で現れている。(もともと、同書「シシ」語尾形容詞の「不十分終止」も一例のみにすぎないようであるが、この場合、本来の終止形「一シ」語尾での例が見出しにくいことに注意しておきたい。)

3. 古代語に於ける「不十分終止」の様相

第1節に見た古典語終止形による「不十分終止」は、先行研究に指摘されるように、平安期・中世前期にも見られるものである^{註5}。(7)に中古の例、(8)に院政期の例、(9)に中世前期の例を示す。

(7) a 返しせねば憤けなし、えせざらむ人は、はしたなからむ (源氏物語・帶木)

b 「……」と高やかに言ふを、聞きすぐさむもいとほし、しばし休らふべきに、はた、侍らねば、げにそのにほひさへはなやかに立ち添へるもすべなくて、逃げ目を使ひて、… (源氏物語・帶木)

c いみじう暑き昼中に、いかなるわざをせむと、扇の風もぬるし、氷水に手をひたし、もてさわぐほどに、 (枕草子)

d この世の人は、男は女にあふことをす、女は男にあふことをす。 (竹取物語)

e 御車もいたくやつし給へり、前駆も追はせ給はず、誰とか知らむとうちとけ給ひて、すこしさしのぞき給へれば、… (源氏物語・夕顔)

f 今はこの世を離るる際にて、ことごとしく思ふべきにもあらねど、またしか棄つる中にも、棄てがたきこと、ありて、さまざまに思ひわづらひ侍るほどに、病は重りゆく、またとり返すべき忙もあらぬ月日の過ぎゆけば、心あわたたしくなむ。

(源氏物語・若菜上)

- (8) a 公助ニ走り懸リテ打ムト為ルニ、公助ハ若ク盛也、父敦行ハ八十余ノ者也、公助逃ムニ追ヒ可付クモ非ズ。
(今昔物語集・巻19・26)
- b 糸強々シ氣ニ月無氣ニ責メ云フニ、女、且ハ怖シキ者ノ心不破ラジト思フ、且ハ角生テ疎マシケレド、国王態ト然カ可有シトテ遣タレバ、終ニ怖々聖人ノ云フ事ニ随ヒヌ。
(今昔物語集・巻5・4)
- c 年来我ニ挑ミ競テ、勝ルル時モ有リツ劣ル時モ有テ年来ヲ過ツルハ、此レ必ズ只人ニハ非ジ。
(今昔物語集・巻14・40)
- d 月来ニ成ニケレバ、任ハ畢ヌ、此テノミ可有ルキ事ニモ非ネバ、上ナムト云程ニ
(今昔物語集・巻24・42)
- (9) a 「…されども思ひたつならば、そこに知らせずしてはあるまじきぞ。夜もふけぬ、いざや寝ん」と宣へば…
(平家物語・小宰相身投)
- b 同廿三日の暁、宮は、「此寺ばかりではかなふまじ。山門は心がはりしつ、南都はいまだ参らず。後日になつてはあしかりなん」とて、三井寺をいでさせ給ひて、南都へいらせおはします。
(平家物語・大衆揃)
- c 城の内の兵共、しばしささへてふせざけれども、敵は大勢なり、みかたは無勢なりければ、かなふべしとも見えざりけり。
(平家物語・火打合戦)

このように、古代語に於いても「不十分終止」の使用が認められるところである。次にク活用・シク活用に分けて、形容詞の「不十分終止」の使用状況を見ていきたい。

4. 形容詞の「不十分終止」

- (10) a 返しせねば情けなし、えせざらむ人は、はしたなからむ (源氏物語・帚木)
- b いみじう暑き昼中に、いかなるわざをせむと、扇の風もぬるし、氷水に手をひたし、もてさわぐほどに、
(枕草子)
- c 其ガ此テ宿ノ内ニ候ヘバ、搔去ムト思ヒ候ヘドモ、軀ハ力ハ弱シ、可搔去様モ无レバ…此テ置テ候フ石也
(今昔物語集・巻26・13)
- d つはものども、「くらははくらし、いかがせんずる」と口々に申しければ、九郎御曹司、「例の大だい松はいかに」。土肥二郎、「さる事候」とて、小野原の在家に火をぞかけたりける。
(平家物語・三草合戦)
- e 大の男の鎧着ながら、馬より舟へがはと飛び乗らうに、なじかはよかるべき。舟はちひさし、くるとふみかへしてンげり。
(平家物語・落足)

- f これは、みな人のしもしめしたる事なれば、こともながし、とどめ侍りなん

(大鏡・第1巻・六十四代円融院)

- g 平家のかたには馬に乗ったる武者はすくなし、矢倉のうへの兵ども、矢さきをそろへて雨のふるやうに射けれども、敵はすくなし、みかたはおほし、勢にまぎれて矢にもあたらず。

(平家物語・一二之巻)

- h そのなかに宮の御めのと子、六条大夫宗信、かたきはずつづく、馬はよわし、に井野の池へ飛んでいり、うき草かほにとりおほひ、ふるひゐたれば、かたきはまへをうち過ぎぬ。

(平家物語・宮御最期)

(10) はク活用形容詞の「不十分終止」の例であり、比較的多く見出せる。シク活用形容詞の例を(11)に示す。

- (11) a 「……」と高やかに言ふを、聞きすぐさむいとほし、しばし休らふべきに、はた、侍らねば、げにそのにほひさへはなやかに立ち添へるもすべなくて、逃げ目を使ひて、…

(源氏物語・帚木)

- b 心地ハ悪シ寝入テ物ハ不見ズ成ヌレバ腹立シク妬タク思フ事无限キニ

(今昔物語集・巻28・2)

先に、室町期以降ではシク活用形容詞の本来の終止形「一シ」語尾の「不十分終止」の例が見出し難いことを確認したが、古代語でもそれほど多くはない(平家物語では拾い上げられなかった)ものの使用されていたことが知られる。室町期以降、こうした「一シ」語尾による「不十分終止」が見られなくなったのか、考える必要があるように思う。

なお、『平家物語』では、(12)のように「一シシ」語尾による「不十分終止」が見出せる。

- (12) a 風ははげしし、火もとはひとつなりけれども、吹きまよふ風に、多くの伽藍に吹きかけたり。

(平家物語・奈良炎上)

- b おりふし風ははげしし、くろ煙おしかくれば、平氏の軍兵共餘にあはてさはいで、若やたすかると前の海へぞおほく馳いりける。

(平家物語・坂落)

シシ語尾形容詞の例は、この「はげしし」のみであり、「不十分終止」であることは注意される。中世前期頃の「一シシ」語尾による「不十分終止」の例を以下に示す。

- (13) a 取モ直サスカニナタシ、タ、トラセムモ極テ嗚呼ナリ^{註5}。(草案集)

- b 平家ノ漏聞モ嗚呼カマシ、又鎌倉殿ノ被聞召モ其憚在ベシ

(源平盛衰記・巻41)

- c 何物モ常ニ見ルニハイトハシ、イツモアカヌハ弱ト大乗

(雑談集・三・乗戒緩急事)

- d 和僧様ノ者ヲバ争カ可被召。不思議也。見苦シ、トクノ罷出ヨ。

以上、室町期以前に於ける「不十分終止」の様相を確認した。シク活用形容詞の「不十分終止」に関して、「一シシ」語尾のものも見られるが、その一方、数は少ないものの「一シ」語尾の例も見られるという状況にある。

第1節で室町期以降、古典語終止形が「不十分終止」として機能しているものがあることを確認した。古形残存という観点からすれば、シク活用形容詞においても本来の終止形である「一シ」語尾での使用が期待されるところであるが、当該時期の使用状況を見るに「一シ」語尾での使用例は見出し難く、「一シシ」語尾で実現するようである。シク活用形容詞の「不十分終止」がこうした様相を呈するのは何故かを探るのが本稿の目的であった。そこで、これまでに観察されたところのシク活用形容詞の「不十分終止」の様相を整理する。

◇ 平安期・院政期に於いて、数は少ないものの、「一シ」語尾での「不十分終止」が見られること

◇ 鎌倉期ではシシ語尾での使用例も見られるようになること

◇ 室町期以降では「一シ」語尾ではなく、「一シシ」語尾がこれに与っていること

シク活用形容詞の「不十分終止」のあり方に関する問題として、中世前期以降、「一シシ」語尾で行われるようになるのはなぜかということになろう。この問題を考えるにあたって、

①：「不十分終止」と語彙的特徴との関係

②：「不十分終止」多用とその時期

の二点に着目してみたい。

「不十分終止」が院政期以降において多用されるようになることが、岩波日本古典文学大系『今昔物語集』、同『平家物語』の解説等に指摘されている。シシ語尾形容詞と「不十分終止」との関係を見る上で、院政期・中世前期という時期は看過できないように思う。次節では、この点に着目して、「一シシ」語尾形容詞と「不十分終止」との関係について考察を施してみることにする。

5. シク活用形容詞と「不十分終止」—語彙的観点からの検討—

古典語終止形による「不十分終止」の用法を見るに、特に原因理由を示す用法が多いという傾向がうかがわれる。こうした〈「一は（も）一終止形」条件句〉に関しては、京極興一氏に詳しい^{註5}。

京極氏によれば、『平家物語』に於ける〈「一は（も）一終止形」条件句〉（京極氏は「終止形による条件表現」とされる）には、次の4類がみられるとされる。

(一) 一は一用言の終止形

(二) 一は一なり

(三) 一は一けり・たり・り・つ・ぬ、など

(四) 一(で)は一あり

これらのうち、(一)のグループでは、形容詞の例が多いという。たしかに、中世前期の「不十分終止」を通覧するに、形容詞の例が多いということは認められるところである。ただし、その形容詞の「不十分終止」をク活用、シク活用という活用の別に着目すると、前者の使用例が圧倒的に多い。

形容詞の「不十分終止」において、ク活用の例が多く、シク活用の例が少ないのは何故かであるが、これは、「不十分終止」の機能と語彙の意味との関係から理解することができそうに思われる。

「不十分終止」用法は、ある判断の根拠やある事態を引き起こす要因となる事態・状況を「一は(も)一終止形」という文型で提示することにある。シク活用形容詞を述語とする形容詞文で表される事態はそうした判断の根拠や原因理由とはなりにくいではなからうか。すなわち、シク活用形容詞は「うれしい」「かなしい」の如く、感情形容詞が多いが、こうした感情形容詞文はある事態・判断を引き起こす〈原因・理由〉とはなりにくいため、その用例数がク活用形容詞よりも少ないのであろう。

なお、シク活用形容詞の場合において、「不十分終止」としての例で早いものは、「[▲]悪し」であり、情意性というよりは状態性のものとみてよさそうに思う。

「一シシ」語尾の場合も『平家物語』では、「不十分終止」が3例見出せる(いずれも「はげしし」の例である)。「はげしし」もその意味的な面で言えば、情意的なものというよりは状態的な意味合いが強いものであるといえよう。(14)の「なだたしし」「をこがましし」も言うなれば、状態性の意味合いが強いのでなからうか。

(14) a 取モ直サスカニナタ、シ。タ、トラセムモ極テ嗚呼ナリ。 (草案集)

b 平家ノ漏聞ノモ嗚呼カマシ、又鎌倉殿ノ被聞召モ其憚在ベシ (源平盛衰記)

古典語終止形による「不十分終止」が院政期以降において多用されるようになるが、語彙的な意味の面で、その展開に遅速が存したのではないかと思われる。先に見たク活用・シク活用の使用状況の差異はそうした理由によるものであろうと思われる。

シク活用形容詞に於いて、「一シ」語尾での「不十分終止」として、「あし(悪)」の例が拾い上げられるが、これは情意性というよりは状態性形容詞であるといえよう。その後の資料でのシク活用形容詞の「不十分終止」の例はシシ語尾の「なだたしし」「はげしし」も状態性の強いものであろうと思う。シク活用形容詞に於いて、状態性のものから「不十分終止」

化がはかられていったものであらうと思われる。

6. シシ語尾形容詞と「不十分終止」—連体形終止の一般化との関連—

中世前期以降、シク活用形容詞の「不十分終止」が「一シシ」の形をとるようになったのは、当該時期に於ける連体形終止の一般化の動きが背景にあったのではないかと推測する。

シシ語尾形容詞発生の経緯に関しては、北原保雄氏に従うべき見解が示されている¹⁸。北原氏は、「一シシ」語尾形容詞の発生が院政期頃であることに着目され、これは当時口頭語に於いて顕著となる連体形終止法の一般化を背景にしたものと説かれる。

文語に対して口語形も行われていた時代を想定してみる。その時代においては、ク活用形容詞たとえば「つよし」の口語の終止形は、文語の連体形「つよき」がイ音便化した「つよい」である。この口語形「つよい」から文語形を再構築するには、語尾「い」を「し」に変えればよい。つまり、当時の人にとっては、「一い」は口語形であり、それを「一し」とすれば文語となったのである。(中略) それに対して、シク活用たとえば「はげし」の口語の終止形は、文語の連体形「はげしき」がイ音便化した「はげしい」である。(中略) 口語形「はげしい」からいかにして文語形を再構築するかが問題なのであるが、この場合に、「はげしい」の「い」を取って「はげし」を復元するのは、当時の人にとってはむずかしいことであつたろう。何故ならば、「はげしい」は「はげしく」「はげしき」などの活用形をもち、「い」は重要な活用語尾(あるいはその一部)と意識されていたと想像されるからである。そうであれば、もう一方の再構、つまり「はげしい」の「い」を「し」に変えて文語形「はげしし」を得るという方向を取ることになる。

口語終止形「い」語尾を「し」語尾に置き換えた形が「一シシ」語尾形容詞であると説かれる。シシ語尾形容詞が見られ始めるのが、中世前期という時期的な問題を考慮すると北原氏の説かれるような発生の経緯を想定するのが妥当のように思うし、そのことは、当時の連体形終止法の擡頭をうかがわせるものといえよう。

連体形終止文は、平安期に於いて、

- (15) 雀の子をいぬきが逃がしつる。(源氏物語・若紫)

のように「会語文」に見られるものであつたが、院政鎌倉期には地の文にも見られるようになるなど、通常の終止法に与るようになった¹⁹。

- (16) a 其後大小乗ノ経ヲ結成スル。(今昔物語集・巻4・1)

- b 而ル間責キ思エ聞エ高ク成ヌル。(今昔物語集・巻14・34)

さらに、(17) のように、前期で「一は(も)一古典語終止形」で為されていた形式が「一

は(も)「古典語連体形」へと転ずる様相がうかがえる。

(17) a 燭ノ云ク「…此屋所ハ倉共ノ跡ニ候ヒケル。…」 (今昔物語集・巻26・3)

b 汝仏ノ御弟子ト名乗テ「仏ハ虚言无キ」ト云テ (今昔物語集・巻19・14)

先述の如く、院政期頃、「不十分終止」の例が多く拾い上げられるようになるなど、前代に比して広く行われ始めていったようである。そうした動きにあって、ク活用とシク活用とではその展開に遅速があったものと思われる(「不十分終止」用法が多く拾い上げられる『平家物語』にあって、シク活用形容詞の「不十分終止」の例が少ないのは、これを物語るものであろうと思う)。中世前期以降に於いて、「不十分終止」が多用されるに至って、シク活用形容詞を「不十分終止」用法とする際、「一シシ」語尾の形を取るようになった。それは、如上の終止法のあり方の推移と関係しているものと思われる。

連体形使用の形が通常の終止法となるに伴い、「不十分終止」は「一シ」語尾であることがより顕著になったものと推測される。そのような時期にあって、

(18) 小さい(口頭語終止形)：小さし(不十分終止)【ク活用】

のような対応関係が意識されていたであろう。そうした意識を背景に、シク活用形容詞を「不十分終止」用法として行おうとする際、「一イ」語尾を「一シ」語尾とする(「はげしい」→「はげしし」)ことになったものと思われる。

(19) はげしい(口頭語終止形)：はげしし(不十分終止)【シク活用】

7. おわりに

以上、本稿では、室町期以降に於けるシク活用形容詞の「不十分終止」が本来の終止形「一シ」語尾ではなく、「一シシ」語尾の形で実現するのは何故かについて考えてきた。結論として、

・「不十分終止」多用の時期並びにその発達の背景

・形容詞文の性格と「不十分終止」用法との関係

の二点が大きく関わっているのではないと思われる。

なお、ここでは、古典語終止形の残存という観点から、シク活用形容詞の「不十分終止」が「一シ」語尾ではなく、「一シシ」語尾で現れるという課題に対して、上記の視点から考察を加えてみたに過ぎない。「一シシ」語尾形容詞には、「不十分終止」ではない—例えば、「うれしうれしし」のような疊語用法—ものもある。こうしたシシ語尾形容詞全般を対象とした史的位置付け等については今後の課題としておきたい。

[注]

- (注1) 出雲朝子氏「『はさみこみ』について—文法史的考察—」(『国語学』143集／昭和60年12月)、
鈴木浩氏「接統助詞「し」の成立」(『文芸研究』64号・平成2年)等。
- (注2) 注1 鈴木氏論文、拙稿「接統助詞「し」の成立過程」(『島大國文』28号・平成12年3月)
- (注3) 注1 鈴木氏論文。
- (注4) シシ語尾形容詞の発生の経緯については、例えば、以下の論考がある。
鈴木丹士郎「形容詞「—シシ」について」(『国語学研究』3・昭和38年)
慶野正次「形容詞一元論の再検討—「悪しし」型形容詞の発生について—」
(『神戸学院女子短大紀要』6／昭和49年)
北原保雄氏「形容詞の語音構造」(『中田祝夫博士功績記念国語学論集』／昭和51年)
辛島美絵氏「仮名文書」の国語学的研究」(清文堂・平成15年)
- (注5) 京極興一氏「終止形による条件表現—「平家物語」を中心として—」(『成蹊大学文学部紀要』
／昭和41年・1月)、小田勝氏「古代語彙文の研究」(おうふう、平成18年)
- (注6) 注4 辛島氏「仮名文書」の国語学的研究」による。
- (注7) 注5 京極氏論文。
- (注8) 注4 北原氏論文。
- (注9) 山内洋一郎氏「中世語論考」(清文堂・昭和62年)等。
(きょう けんじ 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授)